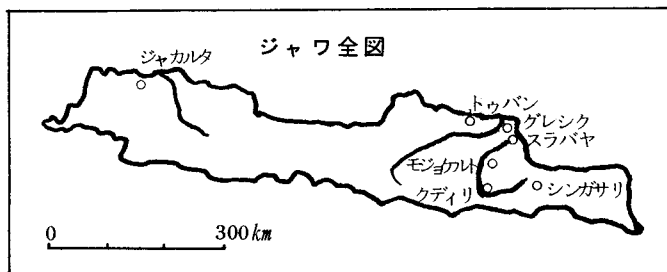


東ジャワのトロウラン古代博物館訪問記

利 光 正 文

ジャワでは有数の大河ブラ
ンタス川の河口に位置する
インドネシア第二の大都市ス
ラバヤは、太平洋戦争中、割と
日本ともなじみの深かった町
である。現在この都市は東部



ジャワの中心地として拡大を続けており、今後ますます発展してゆくものと思われる。私たちは今回のインドネシア調査の期間中、約10日間スラバヤに滞在し、ここを足場として周囲に点在するイスラム関係の古蹟を調べて回った。

スラバヤ近郊のグレシクには、1419年に病没したといわれるペルシア人マリク・イブラヒムの墓がある。大理石造りの立派なこの墓は、数人の墓守に管理され、敬虔なイスラム教徒達の崇拜の対象になっているという。同じくスラバヤ近郊のレランには、これをさらにさかのぼること1082年の碑銘をもつ、ムスリムの一女性をまつた長さ10メートルにも達する大墳墓もある。加えてスラバヤで最も古くイスラムを布教したスナン・アンペルゆかりのマスジド (Mesjid イスラム寺院)等々。

こうした史跡を調べる合間をぬって見学に訪れたのが、モジョケルト市営のトロウラン古代博物館 (MUSIUM PURBAKALA TROWLAN) である。スラバヤからブランタス川沿いに進むこと車で1時間半程で、かの大帝国マジャパイト朝の首府となった由緒ある古都モジョケルトに行き着

く。

1900年オランダ人の農学士マフライント・プント (MACHLAINT POUNT) によって設立されたという古い歴史をもつこの博物館は、予備知識なしに行くと見落としそうになるくらいこじんまりとした平屋建ての建物で、入場料も1人25ルピア (10円) という他の観光地に比べると格安の額であった。こうした外からの印象とはうらはらに、中に展示されている収蔵物は、なかなかどうしてすごいものばかりである。展示室は第一室から五室まであり、それぞれの時代 (王朝) 別にまとめられている。

まず第一の部屋。ここには元寇関係の遺物が置かれている。中国への入貢を拒否したシンガサリ朝のクルタナガラ王をこらしめるためにフビライから派遣された元軍2万の将兵は、1292年ジャワ北岸のトゥバンに上陸し、クディリの都を攻撃した後に中国へ引き上げてゆく。この時に元軍の残したものの、例えばたくさんの銅銭、各種の青銅器、ヤリや刀等の武器、そういったものが整然と並べられている。それらをながめながら、史上空前の世界帝国を築き上げ、東南アジアにまで侵略

の手をのばしたモンゴル人の底しれぬエネルギーにしばし思いをはせてみた。

次室はシンガサリ王朝の遺品。フビライ軍の侵入を招いたこの王朝は、わずか70年という短命であり、その実態はナゾにつつまれている。当時使われた各種の土器や水がめ、木製のシヴァ神像や装飾品等が並べられているけれども、それらの物からはシンガサリ朝のイメージがどうもわいてこなかった。王朝そのものの性格と同様に。

なんとといっても圧巻は三室と五室のマジャパイト関係の展示物である。元軍の侵略を巧みに利用して新王朝マジャパイトを開いた初代のヴィジャワ王は、名宰相ガジャ・マダの補佐を受けて、現在のインドネシアのほぼ全域からマライ半島にまで及ぶ大帝国を作り上げる。ほぼ250年にわたって続いたヒンドゥー系のこの王朝は、今でもインドネシア人の心の拠り所であり、この国の文化を代表する時代ともいえる。第三室にはヒンドゥー芸術の香り高い僧堂チャンディ(Candi)の石造ミニチュアがたくさん集められている。さらに屋根の装飾品、花器、土製の大きな水がめ、生活用品や貴金属類が所狭しと陳列されていて、栄華を極めたマジャパイト朝の一端をしのばせてくれる。

そして、第五室の入口付近には大宰相ガジャ・マダのテラコッタ製の像がおかれており、その厳しい風貌は今もインドネシアの変遷を見すえているようであった。その外、たくさんの粘土製人形や石のレリーフ、石ころの像等が収蔵されていた。中でも興味をそそられたのは、王朝後半期にイスラム教の流入を見るが、その史実を裏付けるように、ヒンドゥーとイスラムの折衷的な物が多数目についたことである。例えば、頭部は明らかにヒ

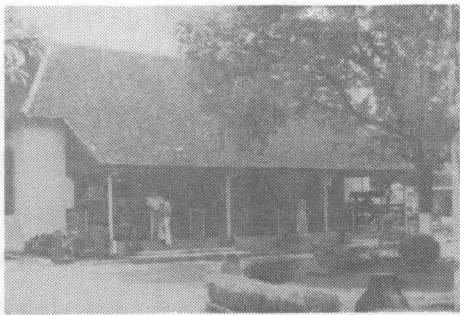
ンドゥーの神を型取っているのに、その下にはアラビア文字が刻みこまれているといった具合である。ジャワの文化が多様性を帯びている一つの証左ともいえるであろう。

それからもう一室。前後するが、第四番目の部屋は陶磁器のオンパレード。時代的には宋朝から清朝までのものが古い順にきちんと配列されていて、その量の多さから、ジャワと中国との頻繁な交易の有様を、改めて思い起こさせてくれるのに十分であった。その他、タイからの水がめやトンキン製の茶わんなどもあり、大いに私たちの目を楽しませてくれた。

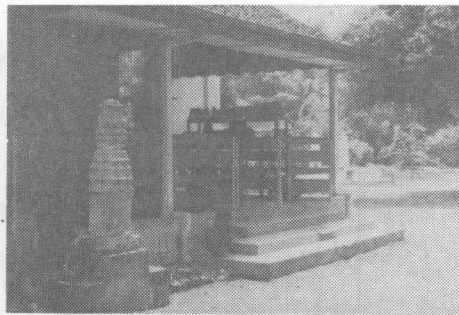
最後に、博物館の庭に出てみよう。そこはヒンドゥー時代に逆戻りしたのかと一瞬錯覚を起しそうなくらい、マジャパイトを中心とした時代の石造美術品の氾濫である。配列の妙など全く考慮に入れず、ただそこに集められて置かれているという感じのおびただしい数の半ば崩れかけた石造品をながめていると、悠久のいにしえに立ち返ったような気分がしてくるから不思議であった。

いずれにしても、ここは一地方都市の博物館にすぎない。しかし、史跡に囲まれて恵まれた立地条件の中にあり、すばらしい遺物を多数所有しているのであるから、もう少し大きくて立派な建物にしたほうが保存のためにもいいのではないかとも思われた。それはとも角、入場料の安さと反比例して、非常に中味の濃い見学であったことに心地よい満足感を覚えながら、このしょうしやな建物をあとにした。

(付記：博物館の見学に際しては、モジョケルトにある“味の素”の工場の現地出向社員 土屋氏に案内していただいた。記して感謝の意を表したい。)



(1)



(2)

(1) 博物館全景

(2) 入口付近

(3) 庭風景



(3)

博物館実習レポート I

大分県立芸術会館東京国立博物館巡回展特別展

日本の美 — 縄文から江戸時代まで —

沢田宗順

1 はじめに

今回大分県立芸術会館でおこなわれた東京国立博物館巡回展特別展「日本の美—縄文から江戸時代まで—」を「博物館実習」の学外実習の一環として見学した。見学をした中で今回の展示に関すること及び気付いたこと、それに対する若干の考察を加えてみたい。

2 東京国立博物館巡回展に関して

東京国立博物館日本古美術巡回展は、今回で18回目を迎えている。今回の巡回展は、我が国の美術品を総合展示することによって、民族の心と形

に触れようとするものであり、この機会に、「日本の美」の美しさを地域住民の人たちに十分に鑑賞し、さらに日本の美というものを考えてもらう機会の一つとしている。

3 芸術会館特別展の展示に関して

大分県立芸術会館の特別展の見学では、最初、学芸員の方から美術品の鑑賞等についての説明を聞くことができた。

美術品の鑑賞について、第一にその美術品の時代背景を考える。つまり歴史を知った上で展示資料をみる。第二にその時代の考え方・思想を考え